



G LIFE TOPICS

学習院大学 国際社会科学部 始動!!

「世界の人と対等に渡り合い、国際的なビジネスの第一線で活躍できる人」を育成するというミッションを掲げ、学習院大学に52年ぶりに開設された国際社会科学部。前半では、英語・海外研修担当教員に、始動して半年の学びの現状を語ってもらい、後半ではこの夏に海外研修へ行った学生たちによる対談の模様をお伝えする。

INTERVIEW

英語・海外研修担当教員メッセージ

開設後半年を経た 国際社会科学部の 学びと海外研修について

国際社会科学部 教授
入江 恵

国際社会科学部は甘くない。どの学生もハードな学びの日々を過ごす。

いざ海外研修へ。帰国後は共通言語としての英語のスキルが著しくアップ。

今年度の4月に開設された国際社会科学部の前期が終了しました。他の国に比べ日本の大学生の学習時間は少なく勉強しないという世間の通説ですが、本学部の学生にはそんな杞憂はまったくありません。どの学生も、非常に「熱」を持って学んでいます。「学科に要する勉強時間が増えていた以上に多い」。学生からのそんな声ももちろん耳に入りますが、想定内です。国際社会科学部は、甘くありません。学ぶ覚悟がある優秀な学生とともに、教員一同も学生たちの「本気」を受け止め、質の高い授業で応えています。

学生たちががんばりは、私たち教員の目を見張らせる成果にも結びついています。私が担当の英語で行うプレゼンテーションのクラスだけを見ても、4月に入学してきた頃と比べると英語で話すことへの抵抗感がなくなり、強い自信が感じられます。英語の授業の90分は、教員はもちろん学生の発言もすべて英語で行われます。4月の初めには、英語の洪水にきょとんとしていた学生たちも今では平然と授業を受け、週6コマの英語授業から毎日出る様々な課題をどんどんこなしています。

この夏休みには、22名の学生が4週間以上の海外研修を体験しました。海外研修先は大きく分けて2つ、1つはニュージーランドのオークランド大学の語学学校、もう1つはベトナムのFPT大学です。

オークランドの研修先は定評のある語学学校です。国際社会科学部では学年が上がるにつれ、専門的な英語の講義を受けるようになるのですが、そのために必要なより高度な英語力を身につけること、そして、ホームステイや他国からくる学生との交流を通しての異文化体験を目的とした学生が参加しました。FPT大学は、ベトナムのトップIT企業が開設した若い私立大学で、ここでは現地のホテルで働くという短期のインターンシッププログラムを組みました。現地の従業員の人達に英語でいろいろ教わり、やり取りをすることで「アジアの英語」を体験するのが大きな目的でした。

今後、アジアの人々と協調した働き方を視野に入れたとき、「国際的な共通言語としての英語」を、ネイティブスピーカーでない現地の方々とのやり取りで体験することは、非常に価値があります。ほかには、個人でイギリスのロンドン大学やカナダでボランティア経験をしてきた学生もいます。帰国後に行われたCASECなどの試験においても、多くの学生の点数は上昇し、学生たちの英語に対するモチベーションの高さが感じられます。

自分で行きたい国、学びたい場所を考える。そこからもう海外研修は始まっています。海外研修先を決めるのは、大きな決断です。大学や親から離れてインディペンデントな状態となる「自立」と、セルフマネジメントしていく「自律」。海外研修準備の間から、それらの力を身につけていってほしいと強く願っています。



学習院TIMES (<http://www.yomiuri.co.jp/adv/gakushuin/>) 2016年12月特集で公開中
「国際的に活躍するための基礎体力をつける!~国際社会科学部第一期生の学び~」



GLOBAL TALKING

G LIFE TOPICS

市毛 雄士郎さん
成城高等学校卒業

本村 江里さん
学習院女子高等学校卒業

矢吹 心さん
常総学院高等学校卒業

海外研修を終えた学生に聞く それぞれの実り

野崎先生：今日は、この夏に4週間以上の短期海外研修をした4人の学生に集ってもらいました。皆さんの海外研修について紹介してください。

本村さん：私はニュージーランドのオークランドに4週間滞在し、オークランド大学の語学学校に通いました。

吉野さん：僕はイギリスのロンドンにあるロンドン大学SOAS(東洋アフリカ研究学院)に6週間行ってきました。

市毛さん：僕はベトナムのダナンにあるFPT大学に5週間の短期海外研修をしてきたのですが、最初の1週間が語学研修で、残りの4週間がロイヤルホテルという現地のホテルでのインターンシップでした。

矢吹さん：私も市毛さんと同じ研修プログラムに参加しました。私はホテルのスパでキッズルームを担当しました。

野崎先生：海外研修に参加して、英語に対しての考え方はもちろん、自分自身が変わったと思うようなことはありますか？

本村さん：日本に戻ってきてから1ヶ月ちょっとなのですが、英語をすんなりと話すことができるよう

になったのが大きな収穫です。海外研修中は日本にいたときよりもspeakingの機会が多く、英語を話すことに抵抗感がなくなりました。

吉野さん：僕はアカデミック英語の力をつけたくて、SOASの「Intermediate Reading & Writing Course(アカデミック英語の読解力と書く力を強化するプログラム)」に参加したのですが、帰国後その成果は早速現れています。学科のアカデミックスキルの授業で出されるエッセーライティングのスコアも、海外研修前の1学期に比べずいぶん上がりました。

市毛さん：ベトナムから帰ってきて、listeningやspeakingが非常に上達したと感じます。本村さんも言うように、英語を使うことにためらいがなくなりました。先生の英語の質問にも、すっと返せるようになり、友人からも「うまくなったね」と言われます。

矢吹さん：ベトナムでは、母国語が英語でない人たちと英語でコミュニケーションをとっていました。ルームメイトはブルネイの人でしたが、まさに英語は世界の共通言語で、英語ができるようになるって様々な国の人とのコミュニケーションが可能になる



野崎 恵志子 教授
英語・海外研修担当教員

吉野 和希さん
小金高等学校卒業

と痛感しました。英語に対するモチベーションがより高まり、もっともっと英語ができるようになりたいと思いました。

野崎先生：国際社会科学部は社会科学を学ぶ学部です。異文化理解や多様性、日本と違う社会について、見てきたこと、感じたことを話してください。

本村さん：オークランドは、ニュージーランドで一番大きな都市と聞いていたので、東京を想像していましたが、大きさは目白くらい。とても住みやすい場所でした。自然がすごく多くて、自然と住まいの「調和」というのはこういうことなのかと思いました。

吉野さん：僕は一人でイギリスに行ったのですが、ロンドンで多様な人種や民族、思想を持つ人々が、それぞれの価値観を認め合って共存しているのを見て、これが多様なのだと感じました。

矢吹さん：異文化コミュニケーションには「積極性」が本当に必要なのだと実感しました。細かいトラブルはたくさんありましたが、不満を感じたときには、交渉することで対応を変えてもらえました。日本での我慢が大事という考えや察してもらった文化とは根本的に違う体験です。また、発展途上国がもっ

ている、社会を良くしたいという「上、上に」というエネルギーを体感するなど、日本にはないものをたくさん実感しました。

本村さん：海外で生活すれば、英語力が上がると思っていたのですが、自分が行動しないと伸びていかないという視点がわかりました。また、国というものを意識する機会となりました。たぶん日本にいては、日本のこともわからなくなります。

吉野さん：そうですね。海外研修中、日本の時事問題について聞かれることもありました。日本人は日本のことをもっと知るべきだと思います。

市毛さん：人によるところもありますが、私は日本ってやはりいい国だなと思いました。帰国してお寿司を食べたときは涙がでましたね(笑)。

野崎先生：英語に対する認識にしても、社会科学を学んでいくという視点からも、特に海外経験がない学生や英語が苦手な一年生にとって、この時期の海外研修は実に効果があると思います。今後の学習に繋がる原体験を作してほしいと思っています。今日の話を聞いて、皆さんは驚けてくれるものと確信しています。